生存者達のエスケープ　オブ　バイオハザード

航海者X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生存者達のエスケープ　オブ　バイオハザード

【Ｎコード】
Ｎ１２８９ＢＡ

【作者名】
航海者Ｘ

【あらすじ】
ある日、突然先生に呼ばれた数人の学生達、しかし呼ばれた生徒たちは何故か全員眠らされてしまう。目が覚めると、街はバイオハザード状態だった！　主人公の藤山　弘とその友人達は、情報収集をして事件の真相を追いつつ、街からの脱出を試みる！！

平和な日の中の異変（前書き）

どうせこの物語は私の妄想　幻想に過ぎません。
実在する人物名　建造物名　概念名　物名と被ってるかもしれません。
ですが、全く関係ありません
尚、これは二次創作です。　話が進むに連れネタバレ（主にバイオハザード）が見られます。
上記を考慮して物語を観劇してください。

平和な日の中の異変

６月１２日　８：１５
菱合（ひしあい）高校

気温が上がり、誰もが半袖の服を身に着ける頃……この菱合高校は、いつもと変わらぬ景色を見ていた。
ほとんどの部活が朝練を終え、友達に会って何を話すか考えている者もいれば、つまらない授業の始まりだと今からため息をつく者もいる。
その中で後者の類に入る生徒、『藤山　弘』は・・・・・・不良みたく下げパンしてたり菓子食べながら登校というわけでもなく、かといって優等生かというとそうでもなく。
見かけではむしろ珍しい程特徴のない生徒だ。・・・・・・・・・・・見かけでは。
「・・・・・・あぁ～あ、つまらねぇ」
と、ため息交じりに言う、これで周りに人がいなかったらただの独り言に過ぎないが、弘は隣にちゃんと人がいることをわかってて言ったのだ。
その隣にいる人間も、弘が自分に放った言葉だとわかる。
「まあそう言わずに・・・・・・また授業中寝ないでよ？」
「んなこと言われてもナァ・・・・・・」
「頼むよ～？　お兄ちゃんの事で何かあると大抵私も何か言われるんだから・・・・・・」
そう、弘の隣には女子がいる、それも二人も。　非リア充から恨まれそうな状態。一人は同級生だが、もう一人は中学３年生。
「全く・・・・・・よくそれで高校なんか行けたものよねぇ」
「なんとでも言えェ・・・・・・」

弘の右側を歩いているのは、彼の同級生の【森房　瑛梨香】やや小さめの輪郭で、他人より大きめの目。今時見かけないセーラー服――菱合高校の制服だけども――を涼しげに着こなし、髪を腰まで伸ばしている。

逆に左側を歩いているのは、彼の妹である【藤山　沙理】やや背が高く、高1の弘と身長があまり違わない。しかし童顔でよく年齢を間違われる。ショートカットのせいか、稀に男子とも間違えられるという。　痩せ型なのでちょっと想像しにくいが。・・・・・・・・・・・実はネト充。

何故中学生が高校の前を歩いているかというと、菱合高校は藤山の家と中学校との間のど真ん中にあるのだ。さらに高校と登校時間が同じなのだから登校時に高校生と一緒に歩くのは不思議なことでもなんでもない。

少し歩いて、三人は菱合高校の正門まで来たところで、沙理と別れを告げ。二人になったところで・・・・・・また新たなメンバーが会話に加わってきた。

「おー！相変わらずやる気ねーなぁ！」

「た・・・・・・頼むから返答に困る質問を朝からしかも大声で聞くのはやめてくれ・・・・・・」

含み笑いをして早足で近寄ってきた彼は【岡城　元樹】　弘をおちょくって遊ぶのが好きだが、決して悪いやつじゃない。実際、二人ともよく遊んでいる。こっちは完全な体育系で、スタミナも尋常じゃない。

神経が太く、いつも変わらぬ精神を保っている。部活の部長という事もあり、リーダーシップや威厳等も申し分ない。

「大体、お前も授業はまじめに受けてないじゃねーか？」

「んなこたーない！」

二人が語り合っているのを、隣にいる瑛梨香は笑いながら聞きいるのであった。

・・・・・・・・・・・・こうして朝起きて、沙理と共に家を出て、瑛梨香と会って、教室に入るまでに岡城も含めて、二人で語り、時々瑛梨香が援護補足。
俺にとってこれは普通の光景・・・・・これが壊されることはないはずだ・・・・・・・・・・・・余程の事がなければ・・・・・・。

三人はそれぞれの教室に――弘と元樹は2組、瑛梨香は1組――入り、とりあえず荷物を置く。教室に入った後は三人とも合流することなく。それぞれの友達と笑顔を交えて会話に入る。
朝練が終わったばかりで、人は今から集まってくるのだが、弘や元樹が会話をするのには構わなかった。何故なら、彼らが他の人間を引き入れて会話の輪を作っているからである。
「それでさ、この前そこのコンビニで――」
「そういえば最近電車が――」
「つーかさー、親が――」
・・・・・・・・・・・・話の種は尽きない。
しかし、そんな笑いの尽きぬ会話の輪も、長く続かない。生徒が全員教室に入った後、ガラガラと戸を開ける音――擬音にすると古めかしく聞こえるが、ちゃんとした鉄製のスライド式ドアだ――が響く。
「はいはい、いやぁちょっと電車が遅れちゃってね！」
「先生・・・・・・またコンビニで買い食いですか？・・・・・・・ついてますよ、口周りにいろいろと」
「えぇ！！？えーとハンカチハンカチ」
生徒の指摘（ツッコミ）に気づき、急いでポケットから取りだしたハンカチを口に当ててごしごしと拭くと、自分がしていたことがおかしいらしく、自分自身まで笑っている。

先生の名前は【花崎　友里】先生としての技能は申し分ないのだが、おっちょこちょいなところというか天然なところがあるらしく、朝は大抵生徒のツッコミがある。
しかし引率力の高さは職員の中でも上位に入るという。一見矛盾しているように見えるが事実なのだから仕方がない。天然で頼れる女先生という一風変わったキャッチコピーを持ち、生徒の人気も高い。
朝のお決まりの儀式（！？）が終わった後、早速授業に入ろうとした――花崎先生は2組の担任で、1時間目が彼女の授業だった――その時、急に花崎先生の調子が変わった。
「皆さん静かに！・・・・・・今から大事な決め事をします！」
・・・・・・場が騒然となった、いつもは何か決める時もこんな真剣な口調にはならなかったからだ。なんだなんだと、ざわめきが起こる。
「決め事というのは、今日私は極めて重要な仕事をします、・・・・・・それの手伝いをする人を選ぶものです」
「先生！その重要な仕事とはなんですか～？」
生徒の一人が聞く。
「今は言えません、ただ、とても大変な仕事です」
花崎先生の口調がどんどん重くなる、・・・・・・それほど重要で大変なのか、それとも何か裏があるのか・・・・・・。弘はまだ成り行きを見守ろうと決めた時だった。生徒の一人が手を挙げ。
「先生ー！私は藤山と岡城を推薦します！」
突如自分を推薦する意見が挙げられた、・・・・・・・・・・・・・・・あいつは池本　真斗！！面倒な仕事はすぐ人に押し付ける俺が苦手な人間だ。
「・・・・・・・・・・・・そうですね、この二人ならやれるかもしれません、お願いできますか？」
認めるのかよ先生！！？・・・・・・・予想外の展開に二人は顔を見合わせる。
花崎先生と弘達――瑛梨香も含める――は仲が良く、互いに持ち

合わせている知識で談議したものだ。だから三人がどれ程仲がいいかも他人より知っている。
いや、それにしてもちょっと安易に決めすぎではないか？もう少し候補者が出るのを待って、俺よりいい人材を選んだほうがいいんじゃないか？
そんな考えを巡らす中、岡城は、
「わかりました、引き受けます」
花崎先生は、
「二人だけでは心もとないので、できればあと数人友達を連れてきてください、では、４時間目が終わった後に職員室前で待っています」
と、妙な補助を出していった・・・・・・。

１時間目が終わって・・・

・・・・・・・・・・・大変なことになってしまった、内容もわからない仕事を受け入れる事になってしまった。当の岡城も・・・
「まーいーじゃねーか！何とかなるって！」
と、この調子。
「しかたがない、よし元樹。早速誰かに声をかけようぜ」
今はそれしかない、あの口調では今から意見を変えることなどできないだろうし、いっそのこと受け入れる他ない。弘は即答した。
「とりあえず瑛梨香だ、どんな仕事でもあいつがいて損はない」
「同意見だな」
二人の意見が一致したところで、都合よく１組教室の前だった、どうやら二人とも無意識に彼女を呼ぼうとしていたらしい。
弘を先頭に教室に入り、その後ろに岡城が入る。
一番窓際の席の一つに、瑛梨香の姿を発見する。瑛梨香はあまり自分から友達の輪に入らない性格なので、一人孤立し、本を読んでいた。開け放った窓から入る風が彼女の髪を揺らす。

いや、一人ではなかった、その後ろにさらに一人、本を読んでいる女子がいる。・・・・・・弘にも見覚えのある顔だった。
「よう、ちょっと話があるんだが、今大丈夫か？」
弘が声をかけると、瑛梨香は本から視線を上げて。
「え？ああ、うん、構わないけど？」
弘は岡城と共に花崎先生から言われたことを説明した。
「・・・・・・・・・・・・・・・ふーん」
「どうだ？」
「どうも気になるなぁ・・・・・・・あの花崎先生がそんなに深刻に？　それも大仕事を？」
瑛梨香は小首をかしげる。
「やっぱり瑛梨香も気になるか？」
「・・・・・・・・・・・・・・まあいいか、わかった、同行する」
瑛梨香が頷いた直後、彼女は背後の気配に気づいた。弘も続いて瑛梨香の後ろを見ると。さっきの女子が興味津々という調子で身を乗り出している。もはや口で言わなくとも。
―（何？何か面白いこと！？）
と、言いたげなことは3人中3人が気づいた。弘は瑛梨香が声を潜め。
「・・・・・・この子も同伴させていいかな？」
「誰だっけ？この子・・・・・・」
すると瑛梨香は驚いた様子で。
「え？中学校の時よく遊んだ子よ！？」
・・・・・・と、言われても、弘の脳内検索では引っかかってこない。
「・・・・・・全くもう、この子は【柳野　英美】、人が多いとあまりしゃべらないから目立たないけど、少人数でしゃべれば面白いんだよ？」
そういえば、弘は中学生のころはあまり少人数で遊ぶというようなことはなかった。もしかすると大勢で遊んでいた時の人の中にい

たのかもしれない。弘は岡城に同意を求める。
「だ、そうだ。どうする？」
「お前の好きにするがいいさ、俺は邪魔で嫌な奴じゃなければ構わないよ」
その岡城の言葉が聞こえたのか、英美は一瞬だけ表情を曇らせると、すぐに回復させて岡城にペコリとお礼をした。
「おいおい、堅苦しいなあ・・・・・・」
「よかったね！　英美」
これで４人だ、と弘は思う。もうこれでいいだろうか？　どんな重要仕事であれ、４人もいれば十分だろうか？すると岡城が少し女子たちから離れて。
「なあ・・・・・・そろそろよくないか？」
「だな、よし、後は四時間が終わるまで待つだけだ」
「流石に待つだけじゃ駄目だと思うがな、授業は受けろ」
弘達は瑛梨香たちと別れ、自分たちの教室へと戻っていった・・・・・。

平和な日の中の異変（後書き）

・・・・・・ええそうですよ、予告していたバイオハザードモノですよ。
え？・・・・・・前書きの注意点がうみねこのなく頃にと被ってる？ついでにくどい？・・・気にしないでください。

今回はちゃんと人間が主人公です
大丈夫です、次回からはコメディーになるとか、そういう路線変更はありません（ずっとシリアス風味）
それではまた～　Ｂｙｅゞ（´・ω・｀）ノ”

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1289ba/

生存者達のエスケープ　オブ　バイオハザード

2012年1月3日03時50分発行